

安満磐手杜神社の馬祭り調査概要

高槻市文化財保護審議会委員 高 谷 重 夫

1. 磐手杜神社

安満磐手杜神社は、もと春日神社と称したのを、明治四十四年、この地の古名により改称したものである。社殿では天智天皇の五年藤原鎌足の願によって勧請したもので、中世には後鳥羽院や西行法師の参詣もあったという。

確実な史料としては、境内入り口の石鳥居に「元和八壬戌三月吉祥日」の銘があり、神社所蔵の棟札に同年のものがある。『大阪府全誌』（巻三）に、「元和八年三月四日、鈴木伝衛門・鍛冶甚兵衛二人を願人と為し、大工岡島勘助・藤原行信をして社殿を造営せしめ」とあるのは、この棟札によるらしい。すなわち、この社の歴史は少なくとも元和八年（一六二二）まで遡ることができるのである。なお、境内の石灯籠には、延宝五年（一六七七）・享保十一年（一七二六）・明和七年（一七七〇）・天保十一年（一八四〇）等のものがある。

2. 馬祭り

馬祭りとは、稚児を乗せた三頭の馬が、神幸に参加する祭りであって、現在は五月五日に行われている。この祭りは、古来幾多の変遷があり、近年は、馬がでなくなり、稚児は徒歩で行列に参加している。本年（平成六年）の祭りには、約24年ぶりに馬がでた。

次に祭りの概要（但し、戦後復活された頃の馬祭りの状況）を記し、最近の変遷を添記することとしたい。

この祭りは、一ノ馬座と馬座（女郎馬）の二つの宮座が中心となって行われ（宮座については後に詳述する）。一ノ馬座からは一ノ馬、馬座からは二ノ馬、三ノ馬を出すのが役目である。馬に乗る稚児は十歳前後の男児である。

五月一日、一ノ馬を出す当屋の家では、オダンツキをする。軒先に一メートル四方ほどの芝土を高さ六〇センチばかりに築き、その上に三本の御幣を挿す。弊の背後には櫓を立て、一方を松の枝で囲い、竹の冊をつける。これがオダンで、他の地方では普通オハケと呼ばれる祭壇である（現在ではオダンは中止している）。終わると、当屋では宮座の人々をよんで饗応がある。これをショウジイリと呼ぶ（現在社務所で行っている）。

この日から一ノ馬のノリコは当屋にとまりこみ、臭い物はいっさい摂らず、学校でも汚れを忌んで椅子の上に特に菰を敷いて座ったという（この習慣も今は行われていない）。

五月三日、二ノ馬・三ノ馬のショウジイリで当屋にオダンを築き、宮座の人をよんで饗応のあることは一ノ馬と同じ。饗応はノリコが最上席に座り、以下宮座で決められている席順に居並び、酌人が一人一人に酒をついで廻る。その時に「お馬・大夫さま、ただ今より御神酒一本さしあげます」と挨拶する。次いで肴（スルメ）を同様の順で配る。一献廻った後、「もうこれ以上さしあげられません」と挨拶があって適当に飲み終わる。（一ノ馬のショウジイリの場合も同じ）。

この日は参道にちょうちんを立て、またケンパイ（献杯）役（自治会より八人である）の人が御輿を組み立てる。

祭日が五日になったのは最近のことで、戦後も、ずっと八日に行われていた。そのころは六日に神輿を出し、村の入り口に注連縄を張った。その時は七日が宵宮で、一ノ馬座の当屋に各座のノリコ・神主・座衆が集って、三献の式があった。

八日は、祭札当日、朝、馬がくる。この村には馬がいないため他から雇うのである。馬が揃うと神前で一ノ馬だけのアシアゲの式がある。宮司が、「お馬の足をあげられて不足には候えども栗毛八寸のお馬、もし気に入らねば一夜のうちにひきかえ申す」と唱えろと、神馬の位がつくという。

次に馬座の一老（最長老）に七度半の使いを出す。そして一老からカモタンナという白い布をもらう。これを馬に飾りつけて禰宜が試乗する。こうするとどんな荒馬でも猫のようにおとなしくなるという。現在では、この行事は馬がでた場合のみ行われる。ケンパイの八人に扇を渡す式がある。ケンパイはこの扇をもって神幸の行列を指揮する。

次は神輿のお渡りである。かき手は宮座とは関係なく、安満三ケ字の若い衆で、入り口の橋のところから伊勢音頭で神殿前まで進み、拝礼の後、かき出す。一同藤の紋のある揃いの襦袢姿である。北の辻の御旅所まで行く。ノリコたちは御輿がでていった後、行列をつくって境内を出て、急坂を降り、市場の辻まで行き、再度行列を揃えて、北の辻の御旅所まで行く。一ノ馬は衣冠束帯、二ノ馬・三ノ馬は烏帽子に赤い素襖、それまではともに袴である。行列の順序は、先頭には紅白二色の大型の御弊、次の二本の鉾、サキバシリ（赤い烏帽子に手甲脚絆の幼児、一ノ馬座より出す）、花神輿（花で造った神輿を二人の男児が担ぐ。座とは関係なく、神社の方で適当な児を頼む）、一ノ馬、二ノ馬、三ノ馬の順である。

北の辻の御旅所では、その前に「御旅所詣り」の儀がある。これも座とは関係なく、十二、三歳の未成女の中から適当な子を選ぶ。以前はこの役をしておくで将来安産になるとのことで希望者が多かったという。振り袖を着て、御供を入れた膳を頭に載いてきて、神輿に献ずる役でゾウニモチとも呼んだ。

次にシバオリの儀がある。これは、神職・ノリコ・村役・座当屋などが輪になって行う簡単な盃事であって、給仕人が、檜の葉・ちまき（藁で巻いたワラチマキ）・蓆を各自に配り、土器で酒をついで廻る。

再び渡御、新町の御旅所（以前兵庫池という池があったが、現在池は埋められた）に至り、ここでも柴折りの式がある。

午後から西国街道を、神社の参道の所まで来ると、ここで、二ノ馬・三ノ馬は解散し、二ノ馬、三ノ馬のノコは馬から降りて大人の肩車に乗り、一ノ馬のみ乗馬のままで進む。そのとき、一ノ馬にはカモタンナを掛け、それを前に長く曳いて、二ノ馬・三ノ馬のノリコはその間に挟まれた形で市場の辻まで進む。これをオウマソロエと呼ぶ。市場の辻の御旅所でも柴折り式がある。もとは二ノ馬・三ノ馬の鞍をおろし、裸馬にして青年が乗って、競馬を二回行った。

後、神輿は神社に還るが、一ノ馬はそこで解散する。また二ノ馬・三ノ馬のノリコたちはここで解散する。ただし、一ノ馬のノリコは、神社へ還り、神輿の御神体を社殿に移す時、本殿の前に座らせ、御神体をその両手に乗せてから、奥に収める。馬を出す当屋では、この後、オダンを撤し、御幣は屋根の上にあげておく。

3. 立合い祭り

明治末期の祭りの様式が、ほぼ戦後のある時期まで続いていたことが知られるが、それはさらに近世まで遡ることができるのであろう。しかし、この時代の祭りは、後世のものとかかなり異なる部分もあった。それは、他村、特に成合との立合祭りとでもいうべきか、両村共同の祭りであったからである。現在でも昔はお旅所が成合にあり、そこまで神事があったという伝えがある。宮座の文書の中にも、宝暦六年（一七五六）の「成合御たひまいり定」というものがある。これは、ただ毎年二人宛の当番の名を以後連年記すに止まるから、旅詣りの内容は明らかでないが、成合の御旅（所）に詣る役があったことは明らかである。

詳細は略するが、とにかく祭りが両村共同で行われたことは確かである。なお、八日には、古曽部よりも馬がでたとあるから、古曽部も、この祭りに参加したらしい。古曽部の高地蔵堂にお旅所があり、そこに神輿を据えて、芝折りの儀があったともある。この共同の祭りは、明治初年まで続いていたという。

4. 宮 座

安満の馬祭りを維持してきたのは宮座であるが、この座は一ノ馬座と女郎馬座（馬座、

村馬座とも呼ぶ) からなる。一ノ馬座は、藤林・入江・小西の三家からなる。この三家は、禰宜の家筋といわれ、神社の掃除とか御供の世話をしてきた家で、このうち藤林家は神職となって、現在境内に居住している。馬座は時代によって、座員の数には変化があるが、大体二十数軒で、役座、組頭座、中入座、後入座に分かれている。これらの区分がいかんして生まれたものかは不明であるが、昔から家筋がきまっていて、新しく加入することは許されない。しかし、事情によって退座、または休座は認められている。

一ノ馬座は一ノ馬、女郎座は二ノ馬、三ノ馬を出すのが重要な役である。女郎座から出す馬を村馬とも呼ぶ。これは禰宜筋の馬に対する村馬の意であるらしい。二頭の馬が出ることは、座の記録では明治になって始めてみられるので、近世以来、この二種があったものかは明かでない。村馬番が二人宛なので、二種の馬は出たと推察するだけである。成合では、明治になって、三ノ馬が新しく生まれたというから、安満でも同様のことがあったかとも思われる。女郎座の中の各座（役座、組頭座、中入座、後入座）のどの座から、二種の馬を出すかは、その年々の相談によるので、あらかじめきまっているわけではない。しかし、多くは役座から二ノ馬、三ノ馬はその他から出る。役座は、座のなかでもっとも古い家筋だとされているので、この座が二ノ馬を出すといえば、他からは出ないという。同じ座からの希望者が争う場合は神主がオミクジで決めた。

現在では、女郎座の中の座は、名はあるが、実際には機能していないようで、これに代わって、馬座小講というものができている。その数は四で、第一組六軒、第二組七軒、第三組四軒、第四組三軒の計二十軒である。これはノリコの世話に関して在するものとの説明であるが、その数が四であることから、旧の役座以下の四座と何等かの関係があって生まれたものと思われるが、詳細は不明である。

5. 馬祭りの意義

以上祭りの現状と歴史並びに祭りを支える宮座組織について略述したが、最後にこの祭りのもつ意味について簡単に触れておきたい。

この種の馬祭りは、かつては高槻市では成合・古曽部・服部・上田部であり、近畿地方では、いくつもの社に見られる。兵庫県では高砂市曾根天満宮をはじめ、姫路市大塩天満宮・加古川市荒井神社・同市崎宮神社等から、一ツ物という名の馬に乗った稚児がでた。和歌山県では粉河の丹生明神の祭りに出る栗栖の一ツモノが有名である。奈良の春日若宮の御祭りに出る日ノ使、京都では祇園祭りの稚児、宇治の県神社の祭りにも同種のものが出る。東北では平泉の祭礼に「お一ツ馬」と呼ぶものが出たという記事が近世の紀行にある。この行事が古く平安朝以来のものである事は、『中右記』長承二年（一一三三）の五

月の条に宇治の一寸物が見える事から明らかである。大山崎離宮八幡宮の中世の文書にも日ノ使が見える。これらは多く美装させ、顔に厚化粧を施した稚児を馬に乗せて、神事に参加させるもので、その扱いは、参加者の中で最高であって、神殿での座席は最も神位に近く、杯事でも、第一に盃がさされる。安満では、祭りの終わり、御神体を神殿に移す際、一ノ馬のノリコを神殿内に目を閉じて坐らせ、その両手に神体を載せてから、奥に移すという。

一ノ馬以外の二ノ馬・三ノ馬を女郎馬と呼び、またノリコを三日女郎と呼ぶが、この女郎は本来上臈と書くべきであって、上臈とは普通身分の高い女性のことを指すが、本来女性とは限らない。三日女郎とはすなわち三日上臈、三日間だけ上臈の身分になるということであるが、それは、嚴重な物忌みに服することによって可能であった。ノリコが当屋に籠居し、一切の穢を忌み、女人がその部屋に入るを許さず、学校の席にも特にコモを敷いたというのが、すなわちその物忌みである。

これによって獲得するのは結局、神聖なる身分ということであり、さらにいえば神の依り代となったのだと考えられている。すなわち神が彼等の身に憑いて、託宣があったのだろうと推察されるが、しかし実際に託宣が行われたという事実は過去にも現在にも存在しない。しかし、彼等が神の依り憑くべき神聖な存在と考えられたことは確かなようである。これは、神の御杖代と呼ばれた伊勢の斎宮に比すべきものであった。

斎宮は女性であるが、安満の祭りに出るいわゆるゾウニモチに当たるのを、大阪市西淀川区野里住吉神社ではイットキ女郎もしくは一夜官女と呼ぶ。この話の意味するところも三日上臈と同じであった。この種の女兒が出る祭りとしては吹田市岸辺神社の祭りがあり、小路の氏子から四人の少女が、頭に神饌を戴いて神社に詣った。島本町尺代の御弓の行事でも、安満のと似た少女の御供もちがあった。これらの少女も、もとはきびしい斎戒の後、一時、一夜だけ、神聖な身となったものと思われる。安満のゾウニモチの少女も、頭に御供を頂く点一寸時女郎と変わりなく、この古習の名残かと思われる。

以上、安満の神事は、日本の祭りの中では他と比べて古風を止めたものといえる。少なくとも神輿や山車ダンジリの渡るだけと比べて古色の濃い宮座神事であり、文献的にも貞享二年（一六八五）まで遡れる古い祭である（このころまで文献上遡れる祭りは決して多くない）。ただオダンが姿を消したのは残念である。費用の点もあろうがもとの姿に返すことができればと思うこと切である。

高谷先生には、永年にわたり本市文化財保護審議会委員をお務めいただきましたが、平成6年8月31日に逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。